

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 〔談話室〕 式年遷宮の足音

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 祐樹, Yamaguchi, Yuuki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000155">https://doi.org/10.57529/0002000155</a>

## 式年遷宮の足音

山口祐樹

伊勢の地で六十二回目の神宮式年遷宮が齋行されて早十年。その足音は少しずつ遠ざかり、そしてまた六十三回目の式年遷宮の足音が少しずつ近づいてきた。

伊勢の神宮では、二十年に一度、皇太神宮（内宮）や豊受大神宮（外宮）をはじめ、別宮、摂末社等の社殿を新たに造替、凡そ千五百点にも上る御装束神宝を新調し、御神体を新宮へお遷しする重儀「神宮式年遷宮」が齋行される。

持統天皇の御代に始まりを見る式年遷宮は、中世の古記録『遷宮例文』にて「夫伊勢二所太神宮、二十年二一度之造替遷宮ハ皇家第一重事、神宮無双大宮也」と評されるように、皇室の最も重要な祭儀として位置づけられ、戦国時代に一時中断されるものの、凡そ千三百年の長きにわたり守り伝えられてきたのである。

前回、式年遷宮が執り行われたのが平成二十五年の十月。そして次の六十三回目の御遷宮が予定されているのが令和十五年の十月である。とは言え、現在の御遷宮はその年だけで完結するという訳ではない。前回の御遷宮に照らし合わせてみると、式年遷宮の最初の祭儀である山口祭が行われたのは、私が神宮出仕を拝命した平成十七年春のことであった。そこから御神体にお遷りいただく「遷御」が行われた平成二十五年までの八年間、換言すれば「遷御」の八年も前から、御用材に関する祭儀、造宮に関する祭儀、そして遷御に関する祭儀と三十余りの祭祀・行事が厳粛に執り行われたのである。その間には「お木曳行事」や「お白石持行事」などの諸行事も賑々しく行われ、伊勢の神領民に加えて全国から集った特別神領民らのかけ声が神路と島路の山々に響き渡っていたことは今でも鮮明に思い出される。

さて、神宮では祭典に奉仕するにあたり心身の清浄を期するため厳格な齋戒が求められていることは良く知られると

ころであるが、勿論式年遷宮においてもより一層の齋戒が求められることとなる。神宮の齋戒については、延暦二十三年（八〇四）に撰進された『皇太神宮儀式帳』『止由気宮儀式帳』にも詳しいが、後に内宮禰宜の荒木田守晨により撰述された『永正記』には「昇殿人。前七ヶ日齋籠也、并神事外禁之也。致齋前散齋之日、無違犯儀。」と記されており、御正殿に昇殿する際は、七日の間齋籠に籠もり、食べるものや交わす言葉でさえも厳しく制限された中で心身を清める『齋籠（参籠）』の時を経ることが求められていた。現在では、官制下の明治四十四年に定められた『祭典奉仕員心得』に則り、昇殿するには二夜、御神体の事を奉仕するには五夜の参籠が定められ、またその際には古例に従い「潔齋ノ厳修」「齋食ノ格守」「服装ノ端正」「言語ノ戒慎」を厳守することが求められている。

前の御遷宮の足音を思い返してみると、祭典奉仕に際しては、下席であった私でさえも月の半分ほどは家で寝ることなく齋籠にて参籠していたように思うし、上席の禰宜にいたっては月の殆どを齋籠で過ごしていたのではないだろうか。なぜかという点、現在の定めでは祭儀に際し最大でも五夜の参籠となるわけだが、これは遷宮祭全体に対してではなく、遷宮に関する祭儀一つ一つに対して定められているためだからである。つまり、御神体を新宮にお遷しする「遷御」の前後には、「洗清」「心御柱奉建」「杵築祭」「後鎮祭」「御装束神宝読合」「川原大祓」「御飾」「大御食」「奉幣」といった祭儀が連日のように、そしてこれらが内宮、外宮、第一別宮の荒祭宮、多賀宮と、四箇所時期を前後しながら執り行われる。この祭儀一つ一つに一夜から五夜の参籠が求められるということもあり、それらに奉仕する神職は何日も自宅へ戻ることなく、長期にわたり齋籠内での厳なる清浄を修めた上で重儀に臨んでいたのである。

平成二十五年には、日本人の凡そ十人に一人、一千万人以上の参拜者が神宮を訪れた。来年天皇陛下より式年遷宮の御聴許が下され、第六十三回神宮式年遷宮の準備が本格的に始まることとなれば、その翌年には山口祭そして御木曳行事へと続いていく。コロナ禍ですっかり落ち着いてしまった伊勢の町にも、御遷宮の足音と共に活気に満ち溢れた夏の日が戻ってくることであろう。

（神道祭祀学／神社祭式）